Nine Little Indians

浜田道雄

名古屋にいるＹとは３年ほど会っていない。コロナパンデミクも落ち着いてきたことだし、会いたいなと思ってメールを入れてみた。ところが一向に返事がない。
「ヤロウ、歳とってパソコンも開かなくなったか」
と苦笑いし、今度は手紙を送った。だが一月過ぎてもやはり返事がない。
さすがに「これはおかしい」と思った。
電話すればいいとわかってはいるが、これができない。以前Ｎがおかしくなったとき電話して、「この電話は現在使われておりません」という返事にショックを受けた。いまＹからも同じような返事が来たら・・・　それが怖い。
ようやく情報通のＳに確かめればいいと気づき、メールした。今度はすぐに返事が来た。Ｙは２年前から認知症が出て、記憶障害にまで進んでいる。会話はなんとかできるが、記憶に残らないから意思の疎通は無理だという。やはり、そうだったのか。

学生時代９人の仲間で学内雑誌を出し、拙い若気いっぱいの文章を書いていた。卒業後９人はそれぞれ別の分野に進んだが、仕事をやめたころからまた自然に集まり、年に２回は温泉などに出かけて旧交を温めてきた。
その９人もＦとＧが既に逝き、ＫとＮは認知症。そしていまＹがそこに加わった。Ｍは元気だが、足の骨肉腫で車椅子。なんとか頑張っているのはＳとＴに私の３人だけだ。もうみなで集まることも難しい。
Ｓからのメールを読みながら頭に浮かべだのは、アガサ・クリスティーの「そして誰もいなくなった」にも使われている Mother Goose の一節だった。

“One little, two little, three little Indians・・・”

わが仲間もこうして一人また一人と舞台を降りていく。
次に降りるのは私かもしれない。逝くのならいいが、認知症組は嫌だな。
いや、最後に舞台を降りるのは私かもしれん。そうなったら、そいつァーかなり辛いな。
だが、いずれは舞台に誰もいなくなるのだ。

Ｓのメールは長寿には「寿ぐ」だけでないもっと重い意味があると教える便りでもあった。